

氷 水

夜更けて、カリカリ／＼と削る氷の音が、天の川まで響く。

(玩 亭)

蛩

人ならば、古き都のほとりに住むと云ったやうな蛩の姿。

(比 企)

水 中 花

露店の大きな皿の中で、水中花が徐々に咲きひろがった時その花が、パツと四散した。天空から一直線に落下した一粒の水が、皿の水と溶け合ふたのである。大概水天宮様は雨になる。(玩 亭)

右に挙げた例に依つて、多少とも季題寸言の輪廓だけは感じられた事と思ふが、季題寸言は小品文の一節であつてはならない。短い一箇の中に完全した独自性の内容が含まれなければならない。さりとて、勿論俳句を基調としたものではあるが、俳句を引伸したものであるでもない。

前年北原白秋氏が一時試みた短唱といふのがあつたが、これと季題寸言とは、各々似て非なるものであつた。なほ、永井荷風氏が十年ほど前に、たしか三田文学かに、日本の庭と題して書いた花鳥日記見たいなものがあつた。これはかなりこの季題寸言と共通点を見出し得るものである。両者いづれも両氏の著作集中にはある筈であるから、熱心な諸君は就いて見られたい。

兎に角、目下の処では季題寸言は一口にどういふものであるとい

ふ事に断定出来難い処にある。止むなく自分は、時折書きとめて置いた季題寸言の種々相を描いて、別の方面から覚束ない説明を少し試みたい。

○ 「言葉多きは品少し」、季題寸言にもそのまゝ、よく当はまるべき言葉がある。

○ 季題寸言は、一步誤ると見せびらかしになり、作意が見えずいて嫌味になる。鈴木三重吉さんが書く女の言葉のやうに、つゝましくしかも含蓄がなければならぬ。

○ 季題寸言は、番茶の熱く量多きを好まず、藍手の薄き茶碗の底は、油のごとくしたみおとす玉露の眼覚むるばかりの風味をこそ。

○ 季題寸言は、大廈並び建ちアスファルトを敷詰めた大道ではない。寧ろ、影深く静かな露路である。けれどもそこには忍返しをつけた塀かげに、水引の花がすつと覗つてゐたり、思はぬ大川の横顔がチラリと見えたりする。

○ 或る時、我々に異常に情緒を動かされる事がある。が、しかもそれを俳句に盛りきれない場合が間々ある。その時、季題寸言は、何分かの役立になりはしないだらうか。

○ 俳句が一面「暗示」の文芸である如く、季題寸言も「暗示」に反く場合、その香気を弱める。

○ 「海に秋の日が赤々と落ちた」「或日、秋の日が海ばかり赤赤と染めた」。つまらぬ例かもしれぬが、何れが「暗示」に富み、何れが我々の情緒に響かうか。

選 後 に

(曲水 7-12)

季題寸言もこれで四回発表したことになる。投稿もおひ／＼殖えて新らしい人も見えて来たが、まだやうやくに四回では、何か言は